第３回長久手市地域包括ケア推進協議会　会議録	
開催日時	令和４年３月１８日（金） 午後２時から午後３時３０分まで
場　　所	会議室棟２階会議室 H、オンライン併用
出席者氏名 （敬称略）	委　員　田川佳代子、松永昌宏、野口一真、横山智絵子、 平井佳彦、小幡匡史、大須賀豊博、加藤圭子、 見田喜久夫、松田豊 事務局　福祉部長　川本満男 長寿課長　粕谷庸介 長寿課地域支援係専門員　近藤小百合 長寿課地域支援係主事　藤井厚宏
欠席者氏名 （敬称略）	委　員　横井英臣、辻悦子、浅井通正、今野博伸、 唐澤美穂
審議の概要	１　あいさつ ２　議題 本市の地域包括ケアの取組の方向性について（案） ３　その他
公開・非公開の別	公開
傍聴者	０人
議事内容	別紙のとおり

別紙

1　あいさつ
　　田川会長
2　議題「本市の地域包括ケアの取組の方向性について（案）」
（事務局：資料１に基づき説明）
意見交換

会長：事務局から投げかけのあった「弱りがちな高齢者に対してどのように支えていけばいいのか」について、委員のそれぞれの立場からの発言をお願いしたい。

委員：弱りがちな人を支えていくのかよりも、弱りがちな人こそもっと活躍できるようになってほしい。人は誰でも得意なことや好きなことがある。興味のないことには足が向かない。地域の中で困っている人たちを得意なことで支えていく、そのような仕組みがあるといきいきすると思う。

委員：インフラとしてのサービス量はあると思うが、それを地域の人が知らないことが課題ではないだろうか。どのようなサービスがあるのかを情報弱者に届けていくことが課題。

　また、市の考え方として説明のあった「木をみながら全体を俯瞰してみる」「氷山の海面の下にあるその方の楽しみや何を持って存在意義として感じられるのか、かけがいのない関係は何であるのか重要視していく」といった方向性は、共感できる。

　介護予防に目を向けたときに、これからの長久手市後期高齢者人口が増加する中で、いかに早く地域活動に関与していくのかが重要。自助、互助を考えたときに、定年まで仕事中心、退職後は何もしていなかったような方は、体力低下した状態で介護予防に参加するのは敷居が高い。仕事をリタイアしたあと、すぐ地域で何かしらの役割を見つけて活動できるように関与していくことが大切。それには、地域の情報や、地域ではこのような人を募集している、などの情報を提供する仕組みづくりが大事。

委員：ケアマネジャーをしている。利用者はもともとみんな元気だった、超高齢になり支援が必要になっている。最近の実感としては、新規利用者は８０代が多い。２０年前は７０代もいたが、最近は支援が必要な人の年齢が上がってきていると感じる。

弱りがちな人の定義は難しいが、体は動くが気力が落ちている場合、弱り出すタイミングに着目した支援をしていくことが必要。かかりつけ医が患者の気力の衰えを感じたときに、市が開催している栄養教室や運動教室等へ行けるような声かけ、気づきなどをして利用者の背中を押してもらえるといい。医療との連携が大切と思う。

地域の公共の場（大学病院の運動療育センター、スポーツジム、福祉の家等）へ通っていた人も多い。本人が行けなくなったら終わりではなく、だんだん行きづらくなってきたことをサポートするような、高齢者が地域の場に参加し続けられるような配慮や仕組みが必要。（銀行、郵便局、スーパー、図書館等）

会長：多角的な意見が出ている。他にはいかがか。

委員：１つは、長久手温泉、長寿課と SMART 教室という運動教室を行っている。参加による成果が出ているので、市役所での啓発をもっとやってほしい。

２つめは、愛教大ではクラウドファンディングをやっている。長久手市も取り入れていけないか。子どもが笑顔でいられる市を目指すという方向性があった。子ども達が体験できること、地域の高齢者の知恵を拝借できるような場つくりがあれば良い。

３つめは、恩師の先生が健康麻雀に積極的に取り組んでいる。健康麻雀は、さまざまな自治体でも取組があり、認知機能低下にも効果がある。

委員：開業医のため他の委員のように多角的に見えているわけではないが、通院患者や往診患者等、困ったことがあれば、それを噛み砕いて、力になるように努めている。実際にその人が何を欲しているのか、何をしてほしいのか、具体的に多職種から要望をしっかりと教えていただくと対応しやすい。医療以外のところで、いきいきした生活を送りたい、コミュニティを送りたい、等あると思う。一方的にここで話すと押しつけになってしまうため、本当に一人ひとりがやっていいただきたいことを事細かく教えていただけると良い。

委員：開業医の立場でフレイル予防、運動を勧めているが、高齢者の中で温度差が大きいと感じている。積極的に参加できる人、どんなに勧めても行きたがらない人もいる。腰の重い人をどうやったら参加できるようにするのかが難しい。

あと、長久手市がやっている事業の周知が難しい。患者には、何かあれば包括へ相談するよう言っている。市内でやっている教室の一覧表やポスターやチラシを医療機関へ置くのも良いと思う。

委員：薬局の立場としては、薬局を憩いの場として提供できたらと考えている。総合事業を受ける人の場作りになればと思う。コミュニティの場、いっぱいカフェができたり、フレイル予防の場作りを提供したい。現状、どういうサービスがあるのか、どこに行けばいいのか、地域包括支援センターへどうやってつないでいけばいいのかわからない。

委員：低所得の高齢者が増加しているため、自助そのものが成立するのかハードルが高いと感じる。互助としては、家族、近隣、ボランティア、NPO など相互にサポートし合う中で、サポート側の時間的余裕がネッ

クになる。ある程度クリアできる人を多く広く当たっていくことが必要となる。支えていく側の人数を増やしていくことが重要と考えている。具体的なところでは、社会福祉協議会のボランティアセンターの活性に力を注いでいく。

委員：高齢者の当事者として、市にはいろんなサービスはあるが、自分は個人的に参加していないため、サービスの内容や効果は気になる。総合事業が開始してしばらく経つが、コロナ禍になってから、出歩かなくなった。活動量が減っている現状、体調面では腰、股関節などの不調が出始めているように感じる。市のサービスをホームページで確認したが、知らないことが多かった。ハーモニー体操や口の体操などを見て、効果がありそうだと感じた。しかし、ホームページを見に行かないと見ることができない。回覧を回しても見ない人も多い。高齢者１万人いるが、どれくらいの人が参加するのか気になる。

事務局：延べ人数としては、年間 5,000 人の参加がある。

会長：「支える側」が人材不足であり、支え手に回ることのできる人をいかに増やしていくかが課題である。

本日の会議では、サービス提供側の専門職の出席はあるが、地域住民の代表者の方の出席が少ない。行政が地域住民とどう協働するかが課題と思う。行政、専門職、市民との相互作用を活発にしていくことが課題である。

委員：先日、市内の居宅介護支援事業所が全て集まるケアマネサロンで市内のインフォーマルサービスについて情報共有した。どこにどういう情報があるのかがケアマネが知らないこともある。ケアプランの中にインフォーマルサービスを位置づけるとなっている。担当している利用者だけでなく、要介護になる前の配偶者、家族に対してケアマネが目を広げて声をかけていくことをしている。先生方が言っていたように、どこに行っても同じ場所に同じチラシがあると良い。自宅をサロンとして開放している要介護者もいた。そのような形があると、新たな居場所となる。

事務局：市内の集いの場の一覧である「いこいこガイドマップ」というものを作成しているが、情報の更新が課題。どういうふうに最新の情報を届けるのか、病院等にマップを配架できるのか皆様と情報共有できるように検討していく。

会長：会議の成果として、一つでも実現するといい。

委員：資料２のマップを見ているが、喫茶店の支援は何かあるか。

事務局：最近、カフェで何かできないかと、市内の喫茶店の店長と話をした。認知症カフェなどでできないかと話した。大手のコーヒーチェーン店とも一昨年話をしていたが、コロナ禍で開催できなかった。

委員：高齢者の体を若返せらせる栄養などの情報もある。飲食店と連携

できると良い。

委員：高齢者代表として、外出しないのが実情。ラジオ体操やスロージョギング、柔軟体操などやっている。「こういうものをやるといいよ」という選べるものがあれば良い。市ホームページに、地域いきいきライフ推進事業として YouTube 動画もあり、参考になる。

事務局：コロナ禍で外出できないこともあり、ひまわりネットワークと一緒に体操動画を作成したり、YouTube とリンクしている。実際に高齢者である委員が視聴していただけているという声が聞け、感謝している。本当に観てもらえているのか不安だった。

外出できないところで動画などを配信していけるよう考えている。

会長：資料の残りの部分について、事務局から説明をお願いしたい。

（事務局：資料 1 スライド 20 以降について説明）

委員：アンケート実施する際に、高齢者が外に行くメリットを明らかにできるようなアンケート項目を入れてみてはどうか。

事務局：ありがとうございます。アンケートについては、また相談させていただきたい。

事務局：追加のご意見については、アンケート形式で会議後に頂戴したい

会長：以上で、本日の会議を終了する。